立ち読み版
お姫様があらわれた！
お嫁さんになりたそうにボクをみている…
小説 神楽陽子
挿絵 キグナス

第一話　お姫様があらわれた！　コマンド？　006
第二話　お姫様はボクを誘っている！　コマンド？　052
第三話　お姫様がボクに甘えてくる！　コマンド？　097
第四話　お姫様は仲間を呼んだ！　コマンド？　141
第五話　騎士様は意地を張っている！　コマンド？　153
第六話　逃げられない！　まわりこまれてしまった！　199
エピローグ　ボクはレベルがあがった！　……はず　253

登場人物紹介

Characters

エヴァンゼリン＝S＝ヒーニアス

ティアラに仕える女騎士兼幼馴染み。留学中の世話をするため、同行者として選ばれた。ティアラには王族として相応しい結婚をするよう願っている。

工藤晋也（くどうしんや）

あまり目立たず、お菓子作りが趣味の平凡な少年。幼い頃に訪れたセルカトレアで一緒に遊んだティアラに言い寄られる。

ティアラ＝フォン＝セルカトレア

日本のど真ん中にあるセルカトレア王国の王女で、晋也との再会と結婚を夢見てＴ立中央学院に転校してきた。ド天然かつスーパー世間知らずな性格。豊満すぎるバストを持つ。

「ひぁぁぁぁ！　もっと、こないだみたいに、おくっ、おくまで！　あぁん、わたくしに晋也様の、ちょおだい？　ぇへえぁ！」
ティアラの腰が暴れるせいで浮き輪が揺れた。その拍子に挿入が深まり、オチンチンが子宮までの小道をこじ開ける。
ずちゅずちゅずちゅっ！　ずちゃずちゅ！
「んふぅううッ？　えぁ、は、はいってる……はいっちゃっへるぅ！」
お姫様は悩乱を極め、軽く果てたかのように脚を引き攣らせた。
側位のため、プールで濡れた太腿を撫でやすい。息が整うまで、晋也は張りのあるそれをなぞり、食べ頃のお尻も丹念にさすってやる。
「ちょっと休憩、っはぁ、しないとね」
するとティアラの疲れた表情に、ほっと安堵めいた笑みが浮かぶ。
「でも、いいの？　晋也様の……くふぅ、びくびくって、出したがってるわよ」
「わかるの？　なんだか恥ずかしいな。その通りなんだけど」
王女の肉穴は卑猥なぬるつきで満たされ、俗なチンポを大切そうに包んでいた。うねりが苛烈な締め付けとなり、粘膜から染み出てくる愛液は熱い。
遠慮知らずの肉棒は刺激を欲してのたうち、晋也本人まで苦悶させた。
（もうティアラのことしか考えられないよ！）
放課後の学院であるにもかかわらず、貸切同然のプールでお姫様とセックスだ。眩い夏

の日差しが、ティアラのブロンドと肉感的な水着姿をきらきらと照り返らせる。心理的な背徳感と肉体的な快感は、大きなひとつの官能となり、少年の想いを昂らせた。

「こちらのほうから姫様の声が……あら、晋也殿と……？」

ところが、人の気配に背後を取られてギクリ。晋也もティアラも反射的に口を押さえ、呼吸の音量を抑えようとする。

（ま、まさかっ!?）

恐る恐る振り向くと、プールサイドに佇む人物とばちっと目が合った。制服姿のエヴァンゼリン＝S＝ヒーニアスが王女を探しに来ていたのである。

ただごとではない水遊びを見つけるや、エヴァはどかんと赤面した。

「ななっななな！　何をやっているんですか、し、晋也殿！　すぐにやめなさい！」

セックスを目の当たりにし、かなり動揺しているようだ。怒るにしても剣幕を張ることができず、焦って何回も言葉を噛む。

「わ、わかったから！　すぐやめるよ、ごめんなさ……」

中断するつもりで晋也はペニスを引き抜きにかかった。けれども、いつぞやと同じ行儀の悪い足癖が、少年のわき腹にまとわりつく。

「やめないで？　仲良しなところ、っんぅは、エヴァに見てもらいましょ？　わたくしは晋也様のモノだって、あん、エヴァに証明したいの」

「いい、いやでも……エヴァが」

勇ましい騎士はしかし、プールへと飛び込んではこなかった。靴は脱いだものの、水面にちょんと爪先をつけるだけで、煮えきらない。
「姫様、おやめください！　ここ、こんなところで非常識です！」
「大丈夫よ、晋也様。王国の騎士はね、んふぁは、剣を持っている時は湖に入っちゃだめなの。だからって、エヴァはあの剣を離したりしないし」
セルカトレア王国ならではの慣習が騎士の入水を禁じているようだ。それを重んじるがため、生真面目なエヴァはプールに入ってこられない。
「湖って、プールとは違うんじゃないの？」
「おんなじよ。それより、ほらぁ……はやく、こないだみたいに可愛がってぇ？」
その一方でお姫様は悪い足癖で男の子にしがみつき、女騎士のしきたりなど我関せず。肉体的な愛情を欲しがり、舌足らずな調子の誘惑で男の子を促す。
「ごめん、エヴァ！　ボク、はあ、ティアラのことが好きなんだっ！」
宣言とともに、少年は雄々しい勃起を動かし始めた。
「好き」という言葉が勝手に飛び出すくらいの想いを募らせながらも、彼女を愛する手段は淫猥なセックスでしかない。その背徳感を正当化できないまま、ずぶ濡れのスクール水着を掴み、むちむちの太腿と戯れてしまう。
「こんなふうに女の子のこと好きになるの、初めてで！　はあ、ごめん、ティアラ！」
「あやまることなんてっ、えへぁあ！　ないのっ、わたくし、うれしくって！」

ティアラも晋也と荒々しく息を合わせ、セックスの深さに溺れた。
ペニスにじゃれつく粘膜襞を、前後の方向にかきほぐす。
浮き輪の上で寝そべるお姫様の、揺れ弾む生乳がピストンの目安だ。流麗な波のついたプロポーションがくねり、半透明のスクール水着をぬらぬらと照り返らせる。
「あぁはあん！　晋也様っ、これ、これがいいの！　愛してもらってるのが、ひへぁ、わかって……んあっ、はげしい！」
ティアラは色っぽい喘ぎを散らし、精液の残っている唇をわななかせた。たわわな双乳をかき抱く悩殺のポーズで、男の子のために脚を広げる。
ずちゅっ、ぬちゅちゅ！　ずちゃっ、ぬちゅぬちゃっ！　ぐちゃ！
近いほうの太腿を抱え、晋也は夢中で腰を躍らせた。まろび出る肉唇にサオをしゃぶらせながら、尻込みするほど感じやすい亀頭で膣内を泳ぎまわる。
「や、やめなさいと言ってるんです！　そのような……」
「そっそこぉ！　めくれるっ、晋也様のったら、ひへぁ！　あばれんぼぉ！」
エヴァの制止などお構いなしに、恋人同士の結合部はぬちゃぬちゃと猥音を奏でた。スクール水着から股座へと流れてくる分の水もあって、潤滑油は充分である。
「はあっ、すごいキツキツ……搾られてくよ！」
見られているのに、発情期の喘ぎを止められない。背中越しにエヴァの視線をびんびんに感じれば感じるほど、奇妙な高揚感が込み上げた。ティアラとの愛の深さと挿入の深さ

を見せ付けてやりたくなってくる。
（もうとまんない！　ティアラのこと、好きになりすぎて！）
ティアラの温かい存在感で、ペニスだけでなく身体の中まで満たされるみたいだ。
暴れん坊の肉棒には、粘膜襞が絡みつつ液を煮え滾らせていた。雁首から先では、その熱さがダイレクトに染み込む。なんといっても擦れる際の甘い痺れがたまらない。
「あぁん！　晋也様のっ、またおくに、す、しゅごぃのきちゃう！」
少年の正直かつ荒っぽいアプローチを受け、お姫様はのけぞるように悶絶した。くねる腰つきでツインテールをかきわけ、抱えきれない生乳を転がす。
それを見過ごすわけにいかないエヴァは、一旦更衣室のほうへと撤退した。けれども着替えてくるのではなく、ビートバンを大量に抱え、プールに浮かべていく。
「姫様、今すぐ助けに参ります！」
子猫くらいであれば、その上を渡って濡れずにここまで来られるだろう。しかしエヴァの体重にはほんの一瞬でも耐えられるはずがない。
「晋也殿はお覚悟を……あわっ、わわわわ！　きゃあああ～！」
騎士様は果敢に足を踏み出したものの、バランスを取った甲斐もなく水面に落下した。
ドッボ～～～ン！
冷たい水滴が晋也とティアラに降り注ぎ、火照った身体をぞくぞくさせる。
「晋也様、あんっ、すごぉい！　エッチな動き方してるぅ！」

「エッチな動きって、こう？　んはあ、こういうのがいいんだよね？」
エヴァの様子を見る際に腰を捻ったため、ピストンにうねりが生じたようだ。半円状のエラが摩擦の範囲を広げ、肉洞を効率的に穿り返す。
「ぷはっ、ふしだらです！　晋也殿、男女交際とはもっと……健全であるべきで」
エヴァは最優先で水中から愛剣を引き上げ、ビートバンにしがみついた。金属製の剣を持っているせいで泳げず、接近も遅い。
「健全だよ、こうやって、っくう！　ティアラのこと想ってるんだ！」
傍目には野蛮かもしれないが、晋也にとっては精一杯の愛情表現のつもりだった。金色の性毛にさえ気品のある秘裂をかいくぐり、お姫様のいやらしいヌルヌルを堪能する。
「もっとぉ！　晋也様、オチンチンで、えぁふ、わたくしに好きっていってぇ！」
ぐちゅぐちゃっ、ぐちゃ！　ぐちゃっ、ぐちゃぐちゃ！
卑猥な男女の結合を、エヴァは直視していられないらしい。
「あ、あんなふうに……姫様に出たり、入ったりするなんて……」
凛々しいはずの顔つきは恥じらいを露骨に浮かべ、息を呑んでいた。男性器を見ることからして初めてなのだろう。
オチンチンは膣の窄まりからサオの半ばまで脱し、すぐにまた拡張感の狭苦しい渦へと飛び込んだ。幹胴では皮越しで済むヒダヒダ感が、裸の亀頭を直接しゃぶる。
ティアラのほうの感度も高く、おねだりの声色が切ない。

「晋也様、どう？　あんっ、わたくしのなか、ひへぁあ、きもちいい？」
「よすぎる！　はあ！　と、とまんないよ、これ！」
さきっちょに甘い痺れが漲り、股関節がそわそわした。脊髄を打つほどの反射的な快感で、腰が跳ね、敏感なペニスを好き放題に暴れさせてしまう。
その快楽に今しばらく耐えなければならず、スクール水着のサイドを引っ掴む。
ふたりの乱れぶりにエヴァはたじろぎ、ビートバンで顔の下半分を隠した。
「姫様がこんなお声をあげて……い、いけないことなんですよ？」
さっきよりも制止の声が弱い。奥ゆかしいはずの王女の積極的な悦がりぶりに戸惑い、割り込めないのだろう。
そんな彼女の反応も愉快で、男の子の悪戯はどんどんエスカレートした。
「ほら見てよ、ボクのがティアラのなかに、っはあ、ずぶうーって！」
スクール水着を引っ張りつつ、巨乳も揉みしだく。やや乱暴に求めるくらいがかえって情熱的なアプローチとなり、ティアラの声色が露骨に甘くなる。
「ちゃんと見せたげて？　んあふ、晋也様のずぶずぶぅ！　あっ、あぅんは！」
高貴な淑女の入り口は獣みたいなオチンチンに貫かれ、発情汁を濁らせていた。あられもない太腿は恥汗でべとつき、ほの赤く染まっている。
育ちのよさを忘れつつあり、唇がまったく締まらない。生臭い精液が混ざっているせいもあって飲めないらしい涎がまた垂れ落ちた。

「たまんないよ、ボク！　ティアラと一緒に、うぁあ、気持ちよく！」
欲張ってスクール水着ごと彼女を抱き締めながら、男の子は夢中でダンスを続ける。射精のためというよりも、ティアラの温もりをただ貪りたくてピストンを繰り出す。
ずちゅずちゅ！　ぬちゃっ、ぬちゅ！　ぬちゅぬちゃ！
鼓動のペースが跳ね上がり、理性の領域に戻ってくることができない。
「おなかにきてっ、やぁはあ！　とどぃへるの、晋也様の、おぉ、オチンチン！」
「姫様、はしたない言葉を使っては……し、晋也殿も、もうそれくらいで」
淫らなムードは傍らのエヴァまで呑み込んでいた。茫然自失とした様子で、王女の交尾穴の有様を観察している。大切な剣が再び水中に沈んでいることには気付いていない。
さらに晋也はスクール水着のデルタをなぞり、結合部へと指を潜り込ませた。秘裂の上端に隠れた急所を弾くと、ティアラの肉体に牝痺れが響き渡る。
「んうっあふぅ！　晋也様、そっ、そこらめ！　気持ちよくなりすぎひゃうのお！」
「ティアラも気持ちよくなってよ、はあ、もっと感じて！」
しこったクリトリスは狙いやすく、擦りやすかった。単純に指だけでなく、スクール水着の薄生地も絡めれば、膣の全体がひくひくと疼き、締め付け感が増す。
同時に傘の分厚いペニスは狭い肉洞を前後にくぐり、ティアラを一秒たりとも休ませなかった。一回ごとのピストンに距離があり、怒張は確実に子宮に届いている。
「やっやぁん！　きちゃうの、っあうん！　ぐりぐりっへされへるぅ！」

浮き輪に寝そべるティアラの喘ぎはひっきりなしだ。純情な瞳は熱っぽい酔いを秘め、牝の悦びに目覚めつつある。

ぬかるんだ肉穴は勃起をそれこそ食べるようにしゃぶり、多すぎる液を滲ませた。熱く煮えた粘膜が男の子の急所を愛しそうに締め付ける。

「ボクもう、っはあ、ガマンできない……イク！　ティアラ、イっちゃうよ！」

「わたくしも！　晋也様といっしょに、えへぇあっ、イクイクするぅ！」

肉棒がみるみる熱量を膨張させた。性的興奮は衝動となり、男の子の突き込みを躍起にさせる。おへその下あたりを殴るような勢いで、加速が止まらない。

エヴァは接近してくることなく硬直し、困惑していた。

「……こ、こんな……いやらしいこと……」

敬愛する王女のことを「いやらしい」と評価し、困った表情で視線を脇へと逃がしたがる。しかし目を逸らしきれず、結局は結合部に見入ってしまっている。

「エヴァがやらしいって言ってるよ、ティアラ！　んくはあ！」

クリトリスを指で執拗にいじくりながら、晋也はティアラのスクール水着に身体を擦り付けた。肌と肌が重なるほどの密着姿勢で腰を暴れさせる。

「そこぉ！　晋也様、あんっ！　きへえ？　もっとわたくしの、ずぼってしてぇえ！」

ティアラは艶笑を深め、少年のひたむきなピストンに見惚れていた。唇の端から端へと動きまわる舌がいかにもモノ欲しそうで、浅ましい。

ごめん

汗だくのエヴァは呂律のまわらない調子で喘ぎ、ショートヘアを振り乱した。強い快楽を遠ざけたがってかぶりを振るものの、被虐的な声色で男の子の劣情を駆り立てる。

「エヴァってこんなふうに、うはあっ、感じるんだ？　ぁう、可愛いぞっ！」

高揚感で気も大きくなり、少年は夢中でエヴァの温もりを味わった。双乳の片方を麓で深めに揉みしだきながら、もう片方は乳頭を集中的に擦りたてる。

抜き挿しには角度もつけ、先端でネジをまわすような動きになってきた。腫れた亀頭を子宮孔に押し付け、サオの長さで膣粘膜を薄く伸ばす。これだけ穿り返せば、まだ擦れていない肉襞はないだろう。

「そっそこばかり！　やめ、えひぁう！　おおっおく、これ、とどいへます！」

「やだわ、妬いちゃいそう……エヴァもすごく気持ちよさそうだし」

誉れ高い女騎士は王女の前で痴態を晒し、美唇から舌まで出していた。凛々しいはずの顔つきは酔ったように惚け、瞳に熱っぽい潤いを溜めている。

性感帯への刺激に不慣れなのは間違いなく、男の子のやんちゃなピストンに翻弄されるばかりだ。騎士然とした正装も胸元をひん剥かれ、汗まみれの双乳を揺らす。これでは服を着せられた動物と変わらない。

ぐちゃっぬちゃ、ぐちゃ！　ずちゃっぬちゃ、ぬちゃぐちゃぐちゃ！

ガマン汁の先走る感覚は鮮烈で、そのたび腰がぶるっとした。

亀頭の感覚は溶け、擦れていないと自分の形がわからない。甘い痺れにぎりぎりのとこ

ろで耐えながら、煮えた粘膜襞をかきほぐす。
「どう？　ボクのオチンチン、っはあ、こういうのが、ティアラも好きなんだ！」
ティアラとのセックスで習得したテクニックは確実に効果があった。
王女の名にエヴァが反応し、優等生ぶった態度を取ろうとする。
「そんなにも、あふぅ、姫様と……いけません、ぇはあっ、みだれた男女交際です！」
けれども王女の前で乱れた男女交際とやらに耽っていては、説得力はない。喋るよりも喘ぐ唇は涎の糸をぶらさげ、長距離走のごとく息を乱していた。
肉洞が充分に濡れているおかげで、きついなりにピストンを繰り返すことができる。
パトリックの揺れも折り返しの反動となり、エヴァの締め付けへと強引に飛び込ませてくれた。腰の動きに野性的な弾みがつく。
「気持ちいいよね？　エヴァも、うあっは、もっとしちゃうぞ！」
「やっあはぁ！　しないで、あんっ、もっと気持ちよくしないでぇえ！」
とうとうエヴァは手綱を握ってもいられず、パトリックの首にしがみついた。おかげで彼女の姿勢が前のめりになり、より突きやすくなる。
本当はもっと突きまくって欲しくて、そのポーズになったのかも。声色も甘く、単純に快楽だけではない、晋也への愛情が溢れてしまっているみたいだ。
「おおっおく、おくに届いひゃうんです、ひぇあは！　はれしくしないでぇ！」
ほの赤い太腿の間で伸びきったショーツには、愛液がなみなみと溜まっていた。勃起と

肉唇の合わせ目からはまたも濁ったエキスが垂れ落ちる。オチンチンが好きでたまらないとでもいわんばかりの締め付けが、サオの根元まで届いて心地よい。
「ボクも気持ちいいっ！　はあ、でちゃうよ、もうすぐ！」
興奮状態にある少年は躍起になって、彼女のウエストを捕まえた。エヴァの締め付けをサオの根元まで届かせつつ、雁太で子宮孔をかちあげる。
晋也とシンクロしてエヴァも身悶え、甘酸っぱくにおいそうな吐息を散らす。
「なにかきへるぅ、ぁあん！　きへっ、きてるんです！　しゅごいのがおくに、あはぁあふ、おなかのなかで！　びくびくっれ！」
最初は一方的だったものが、今では意思疎通じみたセックスだ。
オチンチンの脈動は彼女に、オマンコのひくつきはこちらに伝わっていた。苦手なはずの馬に掴まらずにいられないほど、エヴァの悩乱ぶりは狂おしい。スカートは捲れ、晋也の股間で打たれた回数だけお尻を弾ませる。
汗だくの柔乳も火照り、その揺れを荒々しいピストンに同調させていた。ひっきりなしの吐息で煽られるようにショートヘアの毛先がばらけ、乱れてしまう。
「晋也様、なかで出しちゃダメよ？」
「はぁ、で……でも無理だよ、腰がとまんない！」
本命の恋人から注意されたが、肉体は引き返せないところまで昂っていた。性感帯の悦痺れを持続させたくて、エヴァの肉穴から出るに出られない。

（エヴァのなかに出したい……そうだよ、出しちゃえ！）
それに、このチャンスにエヴァの処女を完全にモノにしたい、などという支配的な欲求が膨れ上がった。蠱惑的な肢体を我がもののように撫で、エヴァに執着する。
ぬめった肉襞はペニスにしゃぶりつき、雁首の括れまで貪欲になぞった。こそばゆくてならない亀頭を磨きながら、サオをきつめに食い締めてくれる。
「しんやどの？　もうわたひ、えあん！　どうにか、へあ、なっひゃいそぉれす！」
そこまでいやらしい刺激を作り出しているくせに、恥ずかしがってばかりの初々しさも劣情をそそった。快楽だけでなく彼女そのものを衝動的に欲しくなる。
パトリックは歩みを止め、晋也たちのダンスを安定させていた。しかしセックスはより加速がかかって、少しの加減も利かない。
エヴァの腰を抱き寄せ、野蛮なくらい腰で暴れまくってやる。
ぱんっぱんっぱんっぱんっ！　ぱんぱんぱん！
肉太ごと秘裂に出入りする泡が弾け、リズムよく猥音を奏でた。
悶えるエヴァがパトリックの首にしがみつき、悲鳴みたいな嬌声を張り上げる。
「またおくに、あはっ、あたっへ！　貴方のがおなかで、ぇはあう！　あばれないで、ゆるひ、んぇへぇ！　ゆるしてくらはひ！」
許しを請う台詞さえ、おねだりの調子で悩ましい。
「だめだぞ！　エヴァもちゃんと、っはあ、イクとこまで！」

雄々しい肉棒は痺れつつもエラを張り、彼女の体温をかきだした。晋也の股座も愛液で蒸れ、外気を感じることができない。
「むぅ〜。わたくしとする時より、感じてない？」
むくれる恋人をフォローする余裕もなく、闇雲にストロークを急ぐ。
「はあっ！　エヴァ、ボクもう！　はあっ、はぁはあ！」
「こっこんなの、あふぅ！　はげしすぎます！　えひあっは、しゅごいのきへるぅ！」
エヴァも抜き挿しに専念するかのように、熱っぽいまなざしで結合部を覗き込む。自分までせっかちに腰を振っている自覚はないのかも。
（出しちゃうぞ！　エヴァにボクの！）
尿意の数倍はあるものを猛烈に催し、股間にみるみる淫熱が溜まってきた。こうなっては決壊を数秒ほど遅らせることしかできない。焦燥感を募らせるさきっちょに、粘膜襞をありったけ絡みつかせて扱く。
がっつかれる彼女のほうも、少年の爪先ごと鐙を踏みきり、脚を引き攣らせた。
「ひはっっう、あなたのオチンチンで、わっわたひ！　おんなにされへ、えくっ、もう騎士でいられなくなっれ、あえぃ、はぃいいっ！」
さらにはパトリックの背中がふたりの下半身を跳ね上げる。
晋也はエヴァのうなじを遠慮なしに舐め、呼吸のリズムをよく聞かせた。掴みなおした裸乳は悶え汗でべっとり。優しい愛撫と激しい突き込みが、意地っ張りな騎士様を女の子

として屈服させる。
「ちょっと、晋也様？　なかは絶対――」
「うあぁ出る！　出ちゃうよ、エヴァ！　ひはあっ、はぁあああ！」
濡れそぼった性便器にいやらしくしゃぶり続けられ、怒張の熱量が膨れ上がった。膣のぬるつきがいっそう卑猥に感じられると同時に、尿道へと圧力を込みあがらせる。
どびゅどびゅっ！　びゅびゅっ！　びゅるるるっ！
尿口に届いたところでその圧力が爆ぜ、甘美な悦感をエヴァの膣内にばらまいた。確信犯的とはいえ堪えきれなかった疚しさもあり、排泄同然の胴震えを引き起こす。
放精感に酔いしれる男の子に抱かれて、エヴァは牝デビューを果たした。
「へぇあはぁあああ⁉　あっ、あつぃのでへ、わたしのなかれ、んくぅ！　んあふぁああぁあああああああああああ――――――！」
電流でも流されるかのようにしゃくりあげ、淫欲の表情をとろとろにする。涙いっぱいの瞳も心地よさそうに惚けて、焦点が合っていない。
うら若い肉体は初めてらしいオーガズムに打ち震え、馬上で潮を散らかした。
ブシュウウウウウウウウウ！
膣内ではまだまだ熱い快感が飛び出し、暴れまわる。
オチンチンは嬉しそうにのたうち、エヴァの子宮に情熱を注いだ。淫猥で蕩けるような心地よさが、天井知らずの陶酔感をもたらす。

「うあぁああ……気持ちいいよ、はぁ、エヴァのオマ〇コ！」
勢いが足りなくなって尿道に残った分も絶頂収斂で搾り取られた。晋也に種付けされてしまったエヴァは恍惚として、涎だらけの舌をでたらめにのたくらせる。
「しんやどのの、さ、さっきのが……あん、私のおなかで、んふ、泳いでます……！」
高温のスペルマは子宮から溢れて膣を満たし、ペニスにもまとわりついた。
（これでエヴァの初めても、ボクのモノに！）
罪悪とは切り離せない膣内射精だからこそ、やってしまった背徳感と、してやった達成感が一緒くたに込み上げる。
晋也に抱き締められるエヴァは今までになく脚を広げていた。
「んへぁ、こ、これで……私は、貴方のものに……なってしまったのですね」
その言葉は諦めのものではなく、安堵するかのような調子だ。恋人同士のスキンシップを終えて、やっと素直な女の子となり、照れ屋らしい笑みをちらつかせる。
しばらくして、四肢に倦怠感とともに感覚が戻ってきた。筋が引き攣っており、すぐには動かせそうにない。結合を外すよりもまずは呼吸を落ち着かせる。
「し・ん・や・さ・ま？　出しちゃったわね？」
だが満身創痍で酸素が足らないにもかかわらず、息が止まりそうになった。
隣へと馬を寄せてきたティアラが、にっこりと柔和に微笑む。
ただし目が笑っていない。

王様気分の少年は恋人たちの秘裂をほぐしつつ、高まる快楽に苦悶した。腰が引けそうになるのを堪え、美しい町並みではなく淫猥なテコキを眺める。

ティアラとエヴァは扱く回数を競いあい、粘っこい猥音を奏でた。

ぬちゃちゃ！　ぬちゅっ！　ぬちゅちゅっ、ぬちゃ！

尿道で淫熱がせりあがり、敏感な亀頭から先走り汁をびゅっと噴く。精液かもしれない濃度で、押し出す力が股間でみるみる膨らむ。

「はあっあぃ、イク！　出ちゃうよ、ティアラ！　エヴァ！」

催促のつもりでふたりのクリトリスを弾きながら、晋也は発作を急いだ。涎を拭う余裕もなく、腰で暴れたい衝動に駆られる。

「わたくしのおててで、あふっ、だして？　ガマンしぃで、ぇあっ、んあぇえ！」

「もうだめですっ、んはあ、私も！　イクっていうの、あはえ、きてます！」

ふたりの恋人も全身を狂おしい痺れに襲われ、乳果実を弾ませた。彼女たちのほうも催促するかのようにペニスを扱き、一生懸命な握力に熱意を込めてくる。

圧迫感が一気に股間に込み上げ、溜まっていた高熱を尿口へと押し上げた。

「いいっイクぞ、ふたりとも！　うあぁ、れちゃう、はあぁぁあぁあぁあぁッ！」

真っ赤なオチンチンが濁った種ミルクを噴き出す。

どびゅびゅっ！　びゅびゅっびゅる！　びゅくびゅく！

男の子は脊髄反射で腰をぶるつかせ、甘美な放精感に酔いしれた。これまで高まる一方

だった圧力から解放されたせいで、重心が浮く。
膣のひくつきに促されるまま指を深く曲げると、ティアラとエヴァも腰を打たれたようにのけぞり、達してしまった。
「へあっあぁ、も、もおイクイクってするぅ！　イクイク……しゅきぃいいいいっ！」
「これが、あっえへぇ、私も！　こないだと同じれす、いっイクぅううぅう！」
かろうじて声が叫びにはならなかったものの、唇から涎が乱れ飛ぶ。蕩けた瞳は王国の美しい景観を映しておらず、射精中の汚いチンポを見詰めてばかり。
ずぶ濡れの膣口が俄かに狭まり、少年の中指を欲張って根元まで引っ張り込む。
プシュウウッ！　プシュッ、プシュウウウウウウ！
色違いのショーツはそれぞれ熱い液を漏らし、股底を潤わせた。
びゅっびゅる！　びゅるびゅる、びゅびゅ！
オチンチンが元気にのたうち、催した分の劣情をばらまく。勃起を溶かされるような淫猥さが心地よい。しばらくは声が続かなくなるほど、咽がわなないた。
フロート車の下で大きなイベントがあったらしく、拍手喝さいが起こる。その間も晋也たちは淫らな陶酔感に浸り、みっともない涎を垂れていた。
「やだぁ、晋也様の……んくふっ、これ、ぷりぷりってしてるぅ」
「に、においますよ？　貴方の……オチンチン、まだびくびくって……」
お姫様の綺麗な手がネバネバにまみれ、女騎士の手も指の股から白濁を垂らす。白色の

絵の具でも握り潰したかのような有様だ。どちらも恍惚の笑みを浮かべ、勃起に見惚れる顔つきに締まりがない。

三人の吸う空気にはきつい精液臭が混ざり、噎せそうになった。そのために唇を最大に広げ、灼けた吐息を往復させる。

「すっごい気持ちよかったよ、はあ、ティアラのも、エヴァのも」

達したところからやっと降りてくると、全身を軽い虚脱感に襲われた。

ふたりの恋人たちもかくんと脱力し、少年の肩にもたれかかってくる。同じ一本の肉棒に粘液をぬちゃぬちゃと塗りたくりながら。

「わたくし、あふう、イクイクしちゃった……気持ちよすぎて癖になりそう」

ティアラの吐息が首筋に当たってくすぐったい。

エヴァも恥じらうくせに、獣じみたペニスを離そうとはしなかった。

「いけません、姫様……はぁ、こ、こんな破廉恥なこと、習慣にしてしまっては」

自分の穴にこれが挿入されるのを想像しているのかもしれない。こくりと咽を鳴らし、勃起の逞しい形を欲しそうに撫でる。

中央で寛ぐ少年もセックスが待ち遠しくて胸を高鳴らせた。恋人たちのショーツから手を抜くと、指先がねっとりと透明の糸を引く。

その最中にまた無線が鳴った。とはいえ悪戯に慣れてしまって前ほどの緊迫感はなく、晋也たちは落ち着き払う。

「静かにしててね、晋也様？　はい、お母様……」
ところが、無線を取ったティアラが二言三言の応答のあと、ぽっと赤面したのだ。錆びた歯車みたいにぎこちなく振り向き、晋也とエヴァに理由を伝える。
「お母様が……お部屋を用意してあげるから、続きはそっちでしなさいって。その、お父様には誤魔化してくれたみたいだけど」
顔を真っ赤にしたエヴァが立ち上がろうとするのを、晋也は慌てて押さえなければならなかった。
「ち、ちちっ違います、皇后陛下！　私たちは何も、やや、疚しいことなど」
「スカート穿いてないんだから、立っちゃダメだってば！」
「えっ？　きゃっ、きゃああああああ！」
丸見えのショーツを確認した騎士様の悲鳴は、拍手に紛れてくれたようである。

☆

パレードも佳境となった頃、主役であるはずの晋也たちは王宮へと戻っていた。この日上階に昇ってよいのは王族と一部の護衛だけで、絢爛な城内は静まり返っている。
王女の寝室へと入るやいなや、優等生肌のエヴァが頭を抱えた。
「大変なことに……皇后陛下になんと申し上げればよいのでしょうか……」
「あんっ？　んもう、晋也様ったら、はあ、そんなに焦らないで？」
騎士様の苦悩も当然だ。パレード中の猥褻を后に見抜かれ、おまけに部屋まで用意され

てしまったのである。
「陛下に会わせる顔が……ああっ、ヒーニアス家の名誉を私が貶めてしまうなんて」
「こらぁ、あまえんぼさん？　ほんとに、あふっ、おっぱいが大好きなのね」
「……で、ですから、姫様、晋也殿……っ！」
しかし真面目な騎士様など放って、晋也とティアラは部屋に入ってすぐのところで抱きあい、濃厚な愛撫を交わしていた。ベッドまで行く間も惜しく、彼女の豊乳を暴く。
可憐なドレスが胸元を開くと、芳しい牝のにおいが溢れた。たわわな乳果も室内で照り返るほどの香汗にまみれ、ピンク色のブラジャーにぶらさがっている。
「ティアラのおっぱい、やっぱりおっきいね。大好きだよ」
この王国でもっとも栄養に恵まれたお姫様の、胸のサイズはGカップだ。しかし彼女は狙って挑発できるほど器用ではなく、身を捩って男の子の視線から逃れようとした。
「晋也様、あ、あんまりじろじろ見ないで？」
一見すると大人びた顔つきには、幼く多感な表情が多く、口下手に恥ずかしがる笑みが愛らしい。胸をかき抱くつもりだったようだが、大きさのせいで隠しきれず、無自覚に谷間を寄せあげるポーズになってしまう。
「そんなことをしている場合ですか？　私たちは、そ、その……」
割って入ろうとしたエヴァの怒りは二言も続かなかった。男女一組の情交を目の当たりにして口ごもり、頬を赤らめる。

「ベッドでしよっか、ティアラ。ほら、エヴァもおいでよ」
少年は紳士ぶってお姫様をベッドまでエスコートした。乱暴にならないよう優しく押し倒し、純白のドレスをスカートだけ脱がせる。
「何をしてるの？　エヴァもこっちにきて、一緒に可愛がってもらいましょ？」
「わ、私は……その、こういうつもりで、お部屋にきたのでは」
王女に命令されては逆らえず、エヴァもおずおずとベッドに這い上がった。
剣を外して傍に立てかけ、晋也に脱がされる前に自分でスカートを脱ぐ。さらに騎士服の胸元を開き、発育のよい膨らみを見せびらかす。
「エヴァも大きいほうだよね？　どれどれ」
男の子は服を脱ぎ捨ててベッドに飛び込み、蠱惑的な恰好となった恋人たちを独り占めするみたいに抱き寄せた。
それぞれピンク色の、紫色のランジェリーを覗かせる艶姿が悩殺的だ。頭で考えるまでもなく手が伸び、ふたりの柔乳を遠慮なしに揉み比べしてやる。
「晋也様の、あん、モノなのよ？　わたくしのおっぱいはどっちとも」
お姫様の爆乳はずっしりと重たく、一回や二回の愛撫では全体を把握できなかった。ブラジャーを外してもらうと、艶やかな肌の白さが露になる。
乳肉の麓は出来立ての餅くらいに温かくて柔らかい。汗で粘りつく手触りもお餅に似ていた。少しでも持ち上げたら、重さのせいで指がむにゅうと食い込んでしまう。

「じゃあ、いただきますしちゃうぞ。あっんむぐ」
その頂でひくつく小突起に目をつけ、晋也は深めに頬張った。唾液たっぷりに舌をまわしながら、欲張ってちゅうっと吸う。
「あっあはぁ！　晋也様ったら、あぃふ、赤ちゃんみたい」
悶えるティアラの息が乱れ、次第に声を上擦らせた。スタイルのよい柳腰を捻り、心地よさそうに瞳を潤ませる。少年を見詰めるまなざしは母性的で優しい。
すぐ隣ではエヴァが唇を噛んで堪えていたものの、とうとう色っぽい喘ぎを抑えきれなかった。眉が八の字に折れ、快楽に従うように虚脱する。
「んぁう……ひはあっ！　晋也殿っ、か、加減というものを、えあぁん！」
膨らみの半ばを強めに揉みしだくうち、紫色のブラジャーがずれてきた。出てきた乳頭を指で小刻みに擦ってやると、騎士様の肩がぴくぴくと弱く震える。
少年はエヴァのおっぱいにもしゃぶりつき、夢中で吸い上げた。ティアラほどの圧倒的な大きさではなくとも、温もった柔らかさが心地よい。頬張ったまま舌をうねらせると、エヴァの唇が切ない吐息を散らす。
「そんなに強く、あん、吸わないでください……だ、だめですっ、んくっふう！」
「もっかい、晋也様、ちゅうってもっかい、ひはぁあ？　そっ、そこぉ！」
男の子がおっぱいに甘えているはずなのに、ティアラのほうが甘え上手な仕草で晋也の首筋にしがみついた。素直になれないエヴァも人差し指を噛みながら、汗だくの肉体へと

酸素を取り込む。
（どっちのおっぱいも最高だよ！）
ティアラの爆乳は将来、晋也の赤ちゃんを満腹にさせてくれるに違いないサイズだ。正面から頬張ると鼻まで埋もれ、甘いにおいだけが呼吸になる。
ふたまわりほど小さい分、エヴァの柔乳は全体を一回で揉みしだくことができた。それでも女子の平均より豊かな発育ぶりであり、騎士服に隠しているのがもったいない。
「ぷはあっ、パンツもべちょべちょだね。どうする？」
続いて少年の指先がショーツに差し掛かると、ティアラが照れて頷いた。
「わかってるくせに、んもう。晋也様のイジワル」
「あの、私は……あとでいいですから」
一方でエヴァはあられもない太腿を閉じ合わせ、その死角にショーツを隠す。
晋也は生唾を飲みくだし、膨張しっ放しのペニスを構えた。
（ここ大事だぞ。ティアラから挿れよっか、エヴァから挿れよっか……）
ティアラのほうは見せびらかすように脚を開き、卑猥な挿入を待っている。
「ここよ？　晋也様、んあっはぁ、ぐしょぐしょなの」
指を二本も使ってショーツの縦筋をなぞる準備からして、エヴァより優先してもらえると確信しているに違いない。
「私はほんとに、えぁ、あとで……いえ、今日はもうこれくらいで」

対照的にエヴァは太腿をまとめて抱きかかえ、股座のガードを固めていた。珍しく弱気な表情で「許してくれないのですか？」と首を傾げる仕草が、男心をくすぐる。
「……えっ？　し、晋也様？」
「よし、エヴァからだ！　ボクと気持ちよくなろう」
ティアラの自信を知っていながら、晋也はあえてエヴァの股座へと近づいた。震えがちな太腿を強引に押しのけ、紫色のショーツに手をかける。
「しし、晋也殿っ！　私はいいですから、姫様のお相手を」
エヴァは面白いくらいに赤面し、わたわたと動揺した。乳果実をブラジャーのずれめでかき抱くのが精一杯らしく、目立った抵抗はない。
生地の薄いショーツはぐっしょりと濡れ、秘裂に食い込んでいた。脱がすまでもなく股布を脇にのけるだけで、射精のための入り口が裸になる。
ここに入ったことがあると思うと感慨深い。
「ちょっと、晋也様？　正室のわたくしを後まわしだなんて……」
「ティアラも見てごらんよ。エヴァの、ぐちょぐちょでやらしいんだぞ？」
起き上がってきたティアラを片手で抱き寄せながら、晋也はエヴァの肉花弁を指で広げた。規律を重んじる女騎士の、ひた隠しにされていた本性が明らかになる。
性毛の類は丁寧に剃られており、女の子らしい清潔感があった。肉唇がまろび出てきた奥のほうには、いかにも狭そうな膣口が男の子を待ち構えている。

「や、やだ、エヴァの……わたくしのより濡れてるんじゃないかしら」
同じ女性が見ても愛液は量が多く、股間をお尻に向かって垂れ落ちていた。
異性にも同性にも言葉で辱められたエヴァが上気し、涙ぐむ。
「言わないでください、これはさっき、晋也殿が……」
騎士とは思えない弱気な表情にもそそられ、これ以上は我慢できなかった。興奮状態の怒張を肉唇の隙間に割り込ませ、侵入を試みる。
「一、二の三で挿れるからね？　いくよ、エヴァ。一、二の……」
秒読みを始めると、エヴァが観念したように唇を噛んだ。
「んあぅ……えあはぁ、あいっいいいいいいッ？」
しかし三を言わずに挿れてやる。
ずぶっ！　ずぶずぶずぶ！
拡張感と同時に窄まりが現れ、真っ赤な亀頭を呑み込んだ。粘液の量に助けられ、狭いなりに挿入することができる。ぬかるんだ膣内はエヴァの温かさでいっぱいだ。
「ひへあっふぅ、んえへ、押し込んじゃだめれす、んくぅうッ！」
オチンチンの奇襲が相当効いたらしい。気取ってもいられない緩みきった表情に、快楽の色がありありと浮かぶ。
肉穴は締め付けが強く、少年はたまらず腰をぶるつかせた。
「エヴァのすごい、はあっ、締まってる！」

ショーツのサイドを引っ掴み、膣の狭苦しさに苦悶する。卑猥なぬるつきが性的興奮を過剰に促すせいで、このまま挿入しているだけでも果てかねない。
晋也の脇に抱えられるティアラは、恋人同士の結合をまじまじと見下ろしていた。
「あんなふうに、ずっぽりって……晋也様のおっきいのが、エヴァのなかに？」
驚き、羨ましがる彼女に見せつけるべく、晋也は浮気相手の牝穴にサオの残りを埋めてしまう。エヴァの粘膜は煮えるように熱く、こちらの勃起も過熱しているはずだった。
「はいったよ、エヴァ、んはあ、ボクのオチンチンぜんぶ」
「ひあふぅ、お、おへその、すぐ下まで……んえはっ、きてるみたいです」
強張っていたエヴァの四肢から力が抜ける。
怒張は確実に子宮孔に届いており、膣のひくつきがサオの全体で感じられた。ショーツの股布が引っ掛かるせいで、意図せず角度に捻りがついてしまう。
「ティアラ、今ね？　ボクのがエヴァのなかで、はあ、びくびくってしてるんだ」
「ず、ずるぅい！　晋也様、こないだからエヴァばっかり……ぇあふっ」
意地悪な男の子の言葉に乗せられ、嫉妬深いお姫様が爆乳を押し付けてきた。湿った吐息を晋也の唇へと近づけ、モノ欲しそうに見詰めてくる。結合させるつもりだった肉体をもどかしそうに震わせ、正室だから、と寛容でいられる余裕もないらしい。
「エヴァとしてる途中なんだよ？　ワガママだなあ、あむっンぅぐ」
そんな恋人のいたいけな瞳を覗き込み、晋也は唇を塞いだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

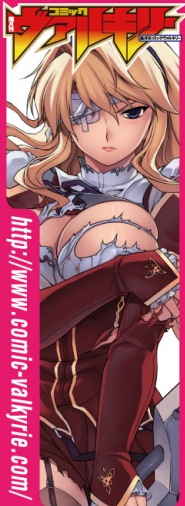
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！